

特別企画「ディケンズと帝国」論文2

『荒涼館』のロンドンと帝国

London and the Empire in *Bleak House*

要田 圭治

Keiji KANAMEDA

1

ポーア戦争(1899-1902)さなかの1901年、帝国主義絶頂とも言える時に、チャールズ・マスターマン(Charles Masterman)は、帝国主義の情熱が、ロンドン改革の情熱を消し去ったのを憂慮して、かつてカーライル(Thomas Carlyle)、ラスキン(John Ruskin)らが精力を注いだ、「民衆の状態」問題“the ‘Condition of the People’ problem”が公共の関心であることをやめてしまったと言っている。これは、自ら編集した *The Heart of the Empire* (1901)に収めた論文、「故国の現実」“Realities at Home”にある言葉だが、この二つのタイトルに示されているように、マスターマンは、“the empire”と“home”を対置することによって、イギリス人の帝国意識を探る手がかりとなる、一つのモデルを提供している。

もちろんマスターマンは、それまでに上がった成果に一定の評価を与えている。注目に値するのは、彼が、衛生改革の大きな推進力として警察力を挙げていることだ。

Utter lack of sanitation, great districts neglected by public bodies and private charity, a population hidden behind the trodden ways of men growing up in undisturbed heathendom and bestiality: these appear no longer possible. Public bodies, the London County Council and similar authorities in the great provincial cities, have been pushing their activities into the dark places of the earth; slum areas are broken up, sanitary regulations enforced, the policeman and the inspector at every corner.

(Masterman 6)

ピーター・ストリブラス(Peter Stallybrass)とアロン・ホワイト(Allon White)が1890年代イギリスについて言う通り、衛生と警察力は想像力の上で結び付いていた

(Stallybrass & White 134)。マスターマンの情熱は、この力によって“the capital of the greatest empire that the world has ever seen” (48)の健康を取り戻すことに向けられていたと言ってよい。その主張の基礎にあるのは、帝国を作り出す人材と政策はロンドンが輩出するという認識だ。

Not only the policy but the material of Empire will come from England. The future colonisers and soldiers, not to mention the traders, who hold the Empire together, will henceforth be more and more the product of the city. [. . .] Thus an adequate knowledge of the state of our city population is essential [. . .].
(Masterman xiii-ix)

ロンドン改革は帝国のためにあり、ロンドンを知ることは、ロンドンの強化に結び付き、ひいては帝国の強化に結び付く。われわれにとって興味深いのは、ここでマスターマンが用いるレトリックのある部分が、50年前にディケンズによって先取りされ、『荒涼館』を貫くいくつかの主要な言説を構成している点である。この作品で、病氣、貧困、犯罪などがイギリスの繁栄の陰画となっているのを見ると、『荒涼館』執筆当時のディケンズが帝国の観念とどう関わったかを検証することが必要になってくる。

じつは、『荒涼館』が書かれた時代に、衛生改革によるロンドンの改良を訴えた論考のなかに、すでに帝国支配の言説に浸透されているものがあつた。1850年にJ・H・バートン(J. H. Burton)が『エディンバラ・レビュー』誌に“Sanitary Reform”という論文を発表したとき、彼はスラムに野蛮を見て、「文明」「civilization」と「洗練」「refinement」(Burton 213)の対極に位置づけた。ここで、現状を打開する有効な手段と見なされたのが、やはり警察制度であった。衛生改革のためにはプライバシーの侵害“invasions of [. . .] privacy” (Burton 213)もやむを得ない、具体的には“some sort of Edile police” (Burton 213)の導入が必要だ、とバートンは言う。“Edile police”は、ローマ帝国において、建築、厚生、警察などを管轄する行政組織のことであつた。バートンによれば、ローマ帝国の偉大さは、都市が犯罪と病気の温床になるのを阻止することによって実現した。

It seems to have been a rule with them [the Romans], that from the time when the foundation of a city was laid, to that of the summit of its greatness, no structural operation, public or private, should be permitted to take a shape which might render it a harbour either for disease or crime; and it is to this vigilant forethought that [. . .] we may attribute the success with which that remarkable people preserved social order, throughout [sic] so dense and vast a mass of human beings as the inhabitants of the imperial city in the days of its greatness. (Burton 214)

このようにイギリスがローマ帝国の威信を自ら再現するのを期待しながら、パートンがその威信と対置させるのが、非文明、具体的には非ヨーロッパだ。ディケンズが彼に近づくのも、まさに衛生改革に関連して、文明を非文明と対置する点においてであるが、ここで注目されるのは、彼もまた警察と医療との間に協調関係を見ていることだ。パートンがプライヴァシーに対する警察力の優位を説いたように、警察は遅延を解消するのに超越的な力を用い、その同じ力によって対象についての知を獲得する。エドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick) は “Under the Public Health Act we had a power to direct an inspector to visit and examine the sanitary condition of a town [. . .]” (Chadwick 4) と述べて、この知と警察力を直接結びつけた。

『荒涼館』で社会を秩序づける力になっているのも警察と医療であり、パケットとアラン・ウッドコートがその二つを代表している。そして、彼らの力は、ロンドンという都市を知ることに基礎を置いていた。この作品の刊行開始直前、ディケンズは、バーデット・クーツ (Angela Burdett Coutts) の関わっていた、後に「ノバスコシャ計画」と呼ばれることになるスラム改良計画に関して書簡で彼女に助言した。そこで彼はフィールド警部 (Inspector Field) と、サウスウッド・スミス医師 (Dr. Southwood Smith) を、まさに地域と人に関する知 (knowledge) において比較することによって、警察力と医療の相同性を明らかにしたのである (Storey, Tillotson & Burgis 573-74)。¹ 他方、ディケンズは、1851年3月8日号の『ハウスホールド・ワーズ』誌に “A Monument of French Folly” というエッセイを書いて、フランス人を笑うイギリス人のナショナリズムを逆に皮肉りながら、ロンドン中心部のスミスフィールドに、屠殺場と家畜市場が無秩序に放置されているのを批判した。彼によれば、パリの家畜市場は、市中ではなく、13マイル離れたポアシにあり、しかも、それがきわめて清潔なのは、警察の監視下にあったからである。

警察力と医療の役割は清潔をもたらし、パートンの言葉を借りれば、都市に社会秩序 (social order) をもたらすことにある。パケットが代表する警察の力は、まさにマスターマンが1901年のイギリスに期待したこと、ロンドンに関する知の確立に基づいている。彼は、ロンドンの家々に浸透し、街を歩き回るが (Mr. Bucket pervades a vast number of houses, and strolls about an infinity of streets [. . .] [626]), それと同じように、ウッドコートもまた街をくまなく歩く。² そのウッドコートがトム・オール・アローンズで、病気のため、通りにうずくまっている女に出会う。

“And so your husband is a brickmaker?”

“How do you know that, sir?” asks the woman, astonished.

“Why, I suppose so, from the colour of the clay upon your bag and on your dress. And I know brickmakers go about working at piecework in different places. And I am sorry to say I have known them cruel to their wives too.” (554-55)

スラムを巡回すること、目に見える証拠から隠れた事実を探り出すこと ウッドコートが採る方法は、そのままパケットの方法に通じる。これに続くやりとりにおいて、彼の推測は、ことごとく女によって確認されるが、この確認を引き出す尋問のスタイルは、このあとジョーに遭遇するとき、よりはっきり形を取ることになる。このとき、ウッドコートを目にしたジョーのおびえが、ホードンの死に際して自分が召喚された「検死」“Inkwhich” (556) の場に彼がいたことに由来している事実は、二人の位置関係が、ジョーの側からあらかじめ規定されていたことを物語っている。じっさいにも、“Come, Jo. Tell me.” “But I must know [. . .]” (558) とたまたみかけるウッドコートは、“the questioner” (558) となって、ジョーが “He was very good to me, he wos; he was the only one I knowed to speak to [. . .]” (556) と描写したホードンの対極に立つことになる。³ 上の女との会話のすぐ後、女から逃げようとするジョーを捕らえ、デドロック夫人追跡に際しては、パケットの依頼を受けて、ガスターから夫人の手紙を奪い取るとき、ウッドコートは警察との協力関係を隠さない。だから、当然、エスタが気付かなくても、パケットだけでなくウッドコートも、ホードンの墓の前に横たわっている女がデドロック夫人だと見抜くことになる。

2

エドワード・サイード (Edward Said) によれば、1840年代までに、小説が審美的形態として、さらには主たる知的な声として、前面に躍り出た。

Because the novel gained so important a place in ‘the condition of England’ question [. . .] we can see it also as participating in England’s overseas empire. In projecting what Raymond Williams calls a ‘knowable community’ of Englishmen and women, Jane Austen, George Eliot, and Mrs Gaskell shaped the idea of England in such a way as to give it identity, presence, ways of reusable articulation. (Said 85)

ディケンズは、ここに名前の挙げられた三人の作家に劣らず “the condition of England question” に深く関わった。変貌する十九世紀にあって、とくに変貌の激しかった都市は、イギリスのアイデンティティ強化を妨げる、危険な隙間を作り出したのであり、衛生改革はその隙間をふさぐ作業に他ならなかった。その成否は都市についての知をいかに獲得するかに掛かっていたが、彼が『荒涼館』とい

う作品において再現してみせたのは、ロンドンを文字通り “knowable community” としてつなぎ止める作業だったのである。このような作業は、必然的にイギリスという “home” を “abroad” との関係性のもとに捉えることになる。このとき、“home” が調査され、評価され、既知のものにされる一方で、“abroad” はあっさり言及されるにすぎない、というサイドの指摘は、『荒涼館』にも一応当てはまっている。だが、この小説においてロンドンは、サイドが示唆する以上に海外と通底しているし、そうでない場合でも、抑圧した海外の気配を濃厚に漂わせていて、共同体に関する知の確立が、思いがけず外部の存在を際立たせているのである。

もちろん、イギリスがした海外戦略の跡を、作品の表層にたどるのはさほど困難ではない。スラムで医療に従事するウッドコートが、海外への進出を別の選択肢として持っているのがその一例である。はじめてエスタと会ったとき、彼はロンドンで開業しているが、しばらくして資金を稼ぐため、船医として海外に出かけることになる。“He was going to China, and to India, as a surgeon on board ship”(214) とある通り、このとき彼のたどる経路は、イギリスが海外戦略を展開する道筋に重なっていて、彼の生活自体が一時期その活動によって支えられていることを示している。また、ジャーディスが、“[...] He [Woodcourt] seems half inclined for another voyage. But that appears like casting such a man away” と言い、エスタが “It might open a new world to him” (605) と応えるとき、日常意識に潜む帝国支配の言説が浮上している。ここで、二人は相手国の利害にあまりにも無関心なのだ。他方、小説が結末に近づいたとき、バグネット夫人が、獄中のジョージに会わせるためにラウンスウェル夫人を連れて、リンカンシャーからロンドンへ急ぐ場面がある。ここで語り手が、“the Cape of Good Hope, the Island of Ascension, Hong Kong, or any other military station” (656) と三つの土地の名前を口にすると、図らずも、この時代にイギリスが展開した海外進出の拠点を挙げていることになる。

この軍事的展開は、衛生改革による裏打ちを要求していた。バートンが50年にロンドンをローマ帝国になぞらえた後、衛生改革を海外への軍事的進出と結びつける言説が生まれる。アンソニー・ウォール (Anthony S. Wohl) によれば、「クリミア戦争当時、チャールズ・キングズリらは、衛生改革が将来の軍事力の基礎を作る」と主張した (Wohl 331)。1857年には、*City Press* が “Wars Abroad and Reforms at Home” という記事で、クリミア戦争が “the physical condition of the masses, whence our soldiers and sailors must be obtained” を明るみに出したのは幸いだと書いた (Wohl 331)。時間的に、イギリス一国の強化を訴えるバートンと、海外戦略のための人材強化を言うキングズリらの言説が交錯している時代に位置

する『荒涼館』もまた、非ヨーロッパを巡る言説の浸透を免れない。ロンドンの都市空間において読者がディケンズの帝国意識に接近しているのは、ネモを葬った墓地と、スラム、トム・オール・アロonzという、衛生問題を抱えた二つの場所であり、ディケンズはこれらの場所に非ヨーロッパを重ねる。いずれも、知が攻略の対象としながら不透明なまま残された場所であり、アイデンティティ確立を脅かすようにして開いた隙間は、確実に外部を引き寄せているのである。

ここで、まずカフィール人問題に焦点を当てる必要がある。『荒涼館』が発表された当時、ケープ植民地で何回目かのカフィール戦争が闘われていた。これは、植民地内に進入を繰り返すカフィール人とボーア人、そしてボーア人の肩代わりをしたイギリス人とのあいだで行われた戦争だった。リチャード・オールティック (Richard Altick) によれば、ロンドンで開かれた「野蛮人」展示会のうち、1850年と1853年に催されたカフィール人のそれが最も成功を収めたが、その人気の裏にはカフィール戦争があった。彼が1853年5月28日号の『アシニアム』誌 (*Athenaeum*) を引いて言う通り、当時、カフィール人は他のどの部族にも増して、イギリス人の注意を惹いていたからである (Altick 282)。この戦争はヴィクトリア朝史の暗部であり、カフィール人展示会は、見えざる敵を確認して、己の精神に生じた危険な隙間をふさごうとする行為であった。

じつは、『荒涼館』執筆より前に、ディケンズは間接的にカフィール人に接していた。彼が編集する『ハウスホールド・ワーズ』誌の1851年4月5日号に、ヘンリー・モーリー (Henry Morley) が “The Cape and the Kaffirs” という記事を書いていたからである。古代エジプトのファラオによる航海に始まり、大航海時代の喜望峰回航の叙述を経て、オランダ人の入植に至るまで、序論部の筆致は客観的、かつ抑制された調子を極力維持しようと努めたものだ。ところが、叙述がカフィール人によるオランダ人入植地への逆侵入に触れたとき、その客観性がぎこちない滑稽さによって乱されることになる。“No doubt the Kaffirs thought that good people [colonists], who appropriated their land so unceremoniously, were fair game, and ought not to complain if, in their turn, they lost oxen.” (Morley 32) といった文句に見える装われた滑稽が、かえってヨーロッパ人のうしろめたさを明るみに出す。

カフィール人の形態的特徴や、性格、そして知能などに関する手短な描写は、40年代にロンドン人類学協会、民族学会を創設した19世紀イギリスの非ヨーロッパに関する学問的記述を粗雑になぞったものだ。また、この記事は他方でイギリスの植民地支配を正当化する性格のものである。ボーア人とカフィール人の抗争を語る滑稽な口調が、イギリス人の対カフィール戦略を語るときに繰り返されて、この戦略がもっている狡猾さの印象を弱めようとする。万国博覧会の年、つまりオールティックが言う「野蛮人」展示会の中休みの時にも、ディケン

ズ周辺のカフィール人への関心がこのような形で持続していた。

他方、『荒涼館』の少し前、衛生上の問題を理由に、市中の墓地を郊外に移す運動が展開されていた。ディケンズはこの運動に深く関心を寄せ、上の記事の前年、すなわち1850年4月6日号の『ハウスホールド・ワーズ』で、W・H・ウィルズ (W.H.Wills) とジョージ・ホガース (George Hogarth) の手になる “Heathen and Christian Burial” という記事でこの問題を扱っている。タイトルが示すとおり、二人の筆者は一貫して文明と非文明、清潔と汚れ、キリスト教と異教との対比でイギリスと非ヨーロッパを語って、ヨーロッパ人のステレオタイプを繰り返した。エジプトに始まり、ローマ人から南米の原住民に至る広範な民族が列挙され、そこにカフィール人も挙がっている。非ヨーロッパを語る際にこの記事が用いるレトリックがそのまま『荒涼館』で繰り返されたとき、この非ヨーロッパ諸民族のうち、トルコ人とカフィール人だけがネモの墓地の野蛮さを言うために残されたのである。

Into a beastly scrap of ground which a Turk would reject as a savage abomination, and a Caffre would shudder at, they bring our dear brother here departed, to receive Christian burial. (137)

この一節は第11章にあるが、1852年5月8日までにこの章を含む第4月刊分冊が執筆された。⁴ 注目したいのは、ディケンズ自身のカフィール人への関与が、時代とともにより直接的になることであり、この一節がこの過程の一階梯を成していることである。1853年5月23日に彼がジョン・リーチ (John Leech) に宛てた手紙にあるように、先の『アシニアム』誌の記事の2日前の1853年5月26日、彼はハイド・パーク・コーナーで行われたカフィール人展示会に出かけた。⁵ このとき彼が自ら目にしたことが、1853年6月11日号の『ハウスホールド・ワーズ』のエッセイ、“The Noble Savage”にかたちを取ったのである。ここで彼は “[...] it is extraordinary to observe how some people will talk about him [the Noble Savage], as they talk about the good old times [...]” (Dickens 1853, 337) と言う。「合理主義の時代に抑圧された自然が、ロマン派の奔放な祝祭のなかに意気揚々と帰還した」のであれば (Stallybrass & White 89)、その後で「高貴な野蛮人」は、帰還したリビドーに華麗な観念を被せて造られた。ディケンズは「高貴な野蛮人」からこの観念をはぎ取ることを目論んだ。だが、このエッセイの書き出しにおいて、彼は具体的に誰を評価しているのか特定せず、ただ、「高貴な野蛮人」の観念を批判するに過ぎない。また彼は最後まで、彼らを語る言葉を見いだせず、その残酷さ、欺瞞、うぬぼれを言い、獣脂と臓物に対する耽溺、悪臭を語って、出来合いの観念に頼るほかなかった。

3

ディケンズは、意識に浮上した見えないものを、見届けようとして果たせなかったのだ。サイドによれば、19世紀後期の小説で明瞭になった空間の差異化は「それ以前のリアリズム小説、歴史小説で既に権威化されていた社会区分の延長線上にある」(Said 94)。この見方に従えば、『荒涼館』に描かれたロンドンの下層社会、中心から離れた「逸脱と不安定の空間」(Said, 94)は後の非ヨーロッパを用意していることになる。サイドによっては、ネモの墓がデドロック夫人を引き寄せたことの意味は次のように語られる。

The astounding power of the scene in *Bleak House* where Lady Dedlock is seen sobbing at the grave of her long-dead husband grounds what we have felt about her secret past — her cold and inhuman presence, her disturbingly unfertile authority — in the graveyard to which as a fugitive she has fled. (Said 94)

ここから細部の誤読を消去してみれば、デドロック夫人の悪徳がすべて下層に還元され、それによって上流社会の権威が保たれるという読解が残る。バケットによれば、デドロックの家系はジュリアス・シーザーにまで遡るのであるから (637)、サイドに倣って言えば、サー・レスターの権威は、シーザーからほどなくして帝政の時代を迎える、ローマの権威に根拠を置いていることになるだろう。しかし、デドロック夫人の経歴は、支配社会が抱え込んだ二重性を物語っており、一方、この墓地、そしてスラム、トム・オール・アローンズに発した毒素はエスタに伝染して、中産階級を外部に解放する。このとき、バケットとウッドコートのは、いずれも最終的には無力さを露呈する。彼らは解釈は施しても、エスタが病気に感染することを防ぐことができていないし、デドロック夫人の死を防ぐことができていないのである。ロンドン is “knowable community”として完結せず、野蛮に対して危険なまでに自らを開いている。

ディケンズにとって、イギリスの外部の「不安定の空間」としてのアフリカは、いまだ知が捕捉し得ない空間である。だからこそ、ジェリビー夫人のアフリカにおける博愛主義も危険なのである。彼女の事業の目的は農業と教育にある。

We hope by this time next year to have from a hundred and fifty to two hundred healthy families cultivating coffee and educating the natives of Borrioboola-Gha, on the left bank of the Niger. (38)

ジェニファー・グリブル (Jennifer Gribble) もみているように、ここにはアフリカの土地を cultivate すると同時に、住民の間にヨーロッパ文化 (culture) を移入するという発想がある (Gribble 90-91)。その発想がイギリスの国家的要請と結び付

いて、帝国主義的進出の典型を形成している。しかしながら、ジェリビー夫人の博愛主義的活動が批判されていることに、ディケンズのイギリス帝国主義批判をみるのはむしろかしい。ディケンズが夫人の活動を批判する裏には、彼が1848年に“The Niger Expedition”で明らかにした考え方、“The work at home must be completed thoroughly, or there is no hope abroad” (Dickens 1848, 133-34) があるが、ここでは単に優先順位が述べられたに過ぎないからである。いま『荒涼館』のロンドンが病んでいるのであれば、夫人がアフリカに入植させるのが「健康な」家族だというのは辛辣なアイロニーだ。今は、まだ機が熟していない。だが、イギリスの体制が整った暁には、アフリカにイギリスの手によって西洋文明が移植されるであろう。ディケンズもまた農業の隠喩で語る。

[. . .] it is extraordinary to observe how some people will [. . .] regret his [the Noble Savage's] disappearance, in the course of this world's development, from such and such lands where his absence is a blessed relief and an indispensable preparation for the sowing of the very first seeds of any influence that can exalt humanity [. . .].

(Dickens 1853, 337)

ディケンズは“culture”ならぬ、播種のイメージで自らの帝国意識を語る。彼から見れば、非ヨーロッパは文明を移植すべき空間である。

『リトル・ドリット』(1855-57)は、ひとつにはクリミア戦争に対する政府の対応の遅れを批判して書かれた。また、ディケンズは1865年のいわゆるジャマイカ事件では、黒人労働者を虐殺した Governor Eyre を擁護する側に立った (Storey 115)。このとき、彼は1857年に勃発したインドの大乱 (Indian Mutiny) に関して、その原因は統治下で生じていることに関する政府の無知にあるとして (Storey 116)、植民地支配に必要な知を強調した。トム・オール・アローンズの惨状について、語り手は、“[. . .] in truth it might be better for the national glory even that the sun should sometimes set upon the British dominions, than that it should ever rise upon so vile a wonder as Tom.” (553) と言う。これはもちろん、“The sun never sets upon the Empire” という表現を踏まえている。帝国の栄光のためには、トムは明るみに出さないほうがよいかも知れない。だが、知は必ずトムを対象として要求する。ディケンズからみれば、帝国支配の前に成すべき作業があったのである。彼は1850年2月6日に Metropolitan Sanitary Association で行ったスピーチで、“self-government” (Fielding 107) を楯に改革に抵抗する家屋所有者を批判した。その同じスピーチで、彼は帝国の首都ロンドンを明快に意識している。

They [those present at the meeting] found every year 13,000 unfortunate persons dying unnaturally and prematurely around them. They found

infancy was made stunted, ugly, and full of pain; maturity made old, and old age imbecile; and pauperism made hopeless every day. They claimed for the metropolis of a Christian country that this should be remedied, and that the capital should set an example of humanity and justice to the whole empire. [Cheers.] (Fielding 106)

ロンドンには、衛生改革を成し遂げることによって、humanity と justice の模範を全帝国に示す義務を負っている。1901年にマスターマンがロンドンを「帝国の中心」と呼んだとき、警察力は衛生改革の推進力として一定の役割を演じていた。ラスキンは1870年に行ったスピーチで、イギリスを全世界の“a source of light, a centre of peace”⁶ になぞらえて国家の威光を語った。ディケンズの上のスピーチを、ラスキンのそれと重ねることが可能かも知れない。しかし『荒涼館』を書いたとき、ディケンズは外に開いたロンドンを見ていた。作品は、外部の濃厚な気配に包まれている。ロンドンの裂け目は、知の裏をかくようにして、ますます外部を浮上させていったのである。

注

使用したテキストは、Charles Dickens. *Bleak House* (1852-53; New York: Norton, 1977) であり、ここからの引用はページ数のみで示した。

- 結果的には、フィールドの限定的な“peculiar sort of knowledge”に対して、サウスウッド・スミスの“sound knowledge and careful consideration”の優位性を指摘している。“[Southwood Smith] is in possession of all the reports made to the Board of Health [. . .] and he knows what work there is in this or that place; and how the people live; and how their tenements are held; and all about them [. . .].” (cf. Storey, Tillotson and Burgess, 573-74)
- Timothy L. Carens も、ウッドコートに衛生改革の担い手を見ている。ウッドコートの帝国での経験を重視する彼は、ウッドコートの軍人との類似性、また masculinity を強調する。だが、ディケンズは、外部の植民地よりも、国内を統一するシステムにより関心を抱き、結果的に警察力と医の相同性を確認したのである。Carens はバケット警部を考察していない。肉體性を消去した知は新しい警察の性格でもあった。
- ネモの死体の前で“professional interest in death”と“remarks on the deceased as an individual” (127) を区別するように、ウッドコートは二つの人格を截然と使い分けている。
- cf. Storey, Tillotson and Burgess 670.
- cf. Storey, Tillotson and Easson 91
- Said 95 に引用。

参考・引用書目

- Altick, Richard. *The Shows of London*. Cambridge: Belknap., 1978.
- Burton, J. H. "Sanitary Reform." *Edinburgh Review*. Vol. 91 (January 1850).
- Carens, Timothy L. "The Civilizing Mission at Home: Empire, Gender, and National Reform in *Bleak House*." *Dickens Studies Annual*. Vol. 26. New York: AMS, 1998.
- Chadwick, Edwin. "On the Consolidation of Police Force and the Prevention of Crime" (1868). *Beyond Public Health: Poor Law and Police*. London: Routledge / Thoemmes, 1997.
- Dickens, Charles. "The Niger Expedition" (1848). *Miscellaneous Papers*. Vol. 1. Millwood: Kraus Reprint, 1983.
- . "A Monument of French Folly", *Household Words* (March 8, 1851).
- . "The Noble Savage", *Household Words* (June 11, 1853).
- Fielding, K. J., ed. *The Speeches of Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1960.
- Gribble, Jennifer. "Borriboola-Gha: Dickens, John Jarndyce and the Heart of Darkness." Ed. Anny Sadrin. *Dickens, Europe and the New Worlds*. Basingstoke: Macmillan, 1999.
- Masterman, Charles. *The Heart of the Empire*. 1901; Brighton: Harvester, 1973.
- Morley, Henry. "The Cape and the Kaffirs." *Household Words* (April 5, 1851).
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. London: Vintage, 1994.
- Schneer, Jonathan. *London 1900: The Imperial Metropolis*. New Haven: Yale UP, 1999.
- Stallybrass, Peter & Allon White. *The Politics & Poetics of Transgression*. Ithaca: Cornell UP, 1986.
- Storey, Graham, ed. *The Letters of Charles Dickens*, Vol. 11 (1865-1867). Oxford: Clarendon, 1999.
- Storey, Graham, Kathleen Tillotson and Nina Burgis, eds. *The Letters of Charles Dickens*, Vol. 6 (1850-1852). Oxford: Clarendon, 1988.
- Storey, Graham, Kathleen Tillotson and Angus Easson, eds. *The Letters of Charles Dickens*, Vol.7 (1853-1855). Oxford: Clarendon, 1993.
- Wills, W. H. & George Hogarth. "Heathen and Christian Burial." *Household Words* (April 6, 1850).
- Wohl, Anthony S. *Endangered Lives: Public Health in Victorian Britain*. London: Methuen, 1984.